

通常体制復旧もバックログ対応続く

■大規模システム障害で米線多数欠航

19日に世界各国で発生した大規模なシステム障害で、航空輸送に大きな影響が出た。運航情報サイト「フライトアウェア」によると、同日の欠航便数は世界で5171便（表①参照）。そのうち、米国発着便数が3403便と大半を占め、空港別の欠航便数はアトランタが1位、シカゴが2位だった（表②参照）。航空会社の多くはすでに通常運航体制に戻っているが、米国向けの航空貨物では搭載スケジュールの乱れに伴うバックログが発生しており、航空会社は順次、搭載してリカバリーを続けている。米国向けスペースはもともとタイトな状況が続いていただけに、一部ではリカバリーに数日かかるケースもありそうだ。

日本発米国向けでは、19日に成田、羽田、関西発の米系航空会社などの一部で欠航や遅延が発生したが、20日以降は通常の運航体制に戻った。UPSは日本発着便で貨物遅延は発生しなかった。ANA Cargo、日本貨物航空（NCA）、日本航空とも19日も含めて影響はなかった。上屋会社ではバックログ発生に伴い対応が求められ、成田の一部では21日まで若干の影響が残ったものの、22日からほぼ通常通りの体制に戻ったケースもある。羽田では東京国際エアカーゴターミナル（TIACT）が、受託航空会社の欠航によるオフロードで第3国際貨物ビルが満床となったため、第1国際貨物ビルの一部を輸出エリアとして臨時的にスペースをねん出して対応。20日以降、徐々にリカバリー輸送がはじまり、22日から上屋

の収容能力は通常体制に戻った。

フォワーダーでは、システム障害の要因となったセキュリティソフトウェアを使用していた海外法人、特に欧米で19日にメールが不通になったほか、オペレーションのIT（情報技術）システムにトラブルが生じるケースがあった。日本でも一部、影響が出たが、22日時点で大半が解消されたようだ。日本発では、19日の米国向け欠航に伴い搭載日が20便にずれ込むことを、19日中に荷主に案内して対応するケースもあった。スペースタイトな中でのリカバリーが続いており、22日時点で、「あと1日、2日で解消する」（フォワーダー）との見方が多い状況だ。欧州およびアジア向けの影響は軽微だったようだ。

表① 世界の航空会社の運航遅延・欠航便数推移

	18日(木)	19日(金)	20日(土)	21日(日)
運航遅延	36,921	46,103	35,204	33,411
米国発着の運航遅延	12,596	12,896	9,149	9,941
欠航	1,494	5,171	2,882	2,871
米国発着の欠航	932	3,403	2,146	1,999

(注) 運航情報サイト「フライトアウェア」のデータを基に本紙作成
(※21日実績は日本時間22日午後2時30分時点)

表② 19日の遅延・欠航便数の上位空港名(空港コード)

発地空港	欠航	遅延
アトランタ(ATL)	447	570
シカゴ(ORD)	164	527
ヒューストン(IAH)	135	375
ミネアポリス(MSP)	126	252
ラガーディア(LGA)	120	235
着地空港	欠航	遅延
アトランタ(ATL)	377	581
シカゴ(ORD)	136	508
シャーロット(CLT)	117	453
ニューアーク(EWR)	116	311
ロサンゼルス(LAX)	115	224

(注) 運航情報サイト「フライトアウェア」のデータを基に本紙作成